

## 氏経卿引付について

名 古 宏 樹  
村 田 輝 久

今年度九期日本史専攻生は専門への足掛りとして、史料講読を受講した。中田先生は我々の爲に從來と異なり、新しく氏経卿引付を採用された。それは氏経卿引付が当時の古文書の形式を知る上に役立ち、又中世独特の読み方をする文字を知ることが出来る。又室町幕府時代の神宮の標子、神宮領の武家に蚕食された有様を知ることの出来る公文類の集録されたものであるからである。その上伊勢に住む表々には親近感があり、彼の手になる自筆本が神宮文庫に残されていることもその大きな理由である。その自筆本を中田先生が写真にしておいて下さって我々が講読するのであるが、活字とは異なった難しさも趣がある。

氏経は、応永九年（一四〇二）義満時代に生まれ、彼の家は代々内宮の祠官で、永享四年七月に博士の叙をもって内宮林官に補任され、寛正三年八月長官（一祿宜）に進み、長享元年に歿している。

彼はこの向における神宮に關する公文書を反古の裏に書き留めて行ったのである。現存する引付には林崎文庫の印があるが、これは江戸時代徳川幕府から百五十両の補助を得て、元禄三年

林崎文庫が出来、そこにあつたからである。

引付とは、武家時代に後日の爲の例証になるべき事柄を註記した書類を云つたのである。現任はやうとその第一巻、白永享五年至同十二年のものが終つたが、我々もようやく先生の指導のお蔭で中世文書にも馴れ、浅くではあるが理解出来る様になつて来た。我々は文学部卒の卒業生だから、その特色に生きた点は注すべきであるが、この様な方面の實力も遺憾のないようにしておくことを忘れてはならない。時折忙しさの故でその努力が制約されるようなことを口にしているものがあるが、若さの持つ精力を傾倒されたいと思う。特に御土の持つこの様なものは教育の実践にも役立つのであるから、死に至るまで我々の研究の実践であるという意気込みで進んで行きたいものです。九期生のなしている講読が一体どのようなものであるか左に泉文のまま記してみるから卒業生諸兄姉並に先輩、松達後輩のなしつつあるものを一読し、今後自己の研究を一層進めて行つて戴きたいと思ひます。

## 序言

可早致沙汰元日御饌供用一志飯高両郡

御鮎米当年分事

石件両郡御鮎米任先例本教致催消沙汰可

令專神役之状所宣如件 以宣

正平五年十月廿日

雜例集に依ると皇太神宮では公文に使用する印を朝廷から鑄下されたのは天平十一年をはじめとする。この改印は承暦元年に焼失し、再び朝廷から「内宮改印」なる四字の印を鑄下され

た。これで當時内宮外宮の呼名のあったことが解る。百鍊抄に、高倉天皇の承安四年頃には内宮外宮と記されているので、この頃は一般的であった。この内外両宮に外院があり、そこに宮庁（政所庁）とあるから、私員全衆解に「庁事春宮司所應改事之處」とあるから、神宮の行事を掌り所であった。そこには正員弥宜が集まり、宮務を執行する。弥宜の公事の衆議（十人）の結果議定した庁裁を奉行する公文を庁宣と叫んだ。これは一志郡、飯高郡の神領に対し、正月用の麴米を出すよう催促したものである。このような文書には、仲々納所しない場合の督促の場合と年々後の年貢免札のように恒例に発せられる場合がある。南北朝の時代から神宮領への政治力が著しく後退するが、あるいはこの地域には尚刀弥の支配権が残存していたか、それに対して出されたものであろう。正平なる南朝の年号を用いているが、これは當時祭主が尚南朝廟の輔任であったからであると思う。しかしこれ以後の氏経卿引付は北朝の年号を用いているし、その為南朝にくみするものを朝敵と同なる表現をして、神宮は北朝側にあったのである。

權弥宜尚氏神主  
序宣

可早致沙汰其曲廻沼木卿以下宮河以東并御米飯高神戶十一側四箇所有地御山神内坂田外城田以下郷々村々不瀧一所普相御兼日致用意隨令聞及不待重告知不廻時刻令免向于志摩国伊雜神戶且任先例令營回伊雜宮且令靜謐寺本法師亦余類并一字子

輩等当神戶押領企子細事

右当神戶者爲伊雜宮御鎮座殿重異于他神領也爲洞官神人之輩同人可令裁余哉而一字子往人未得寺本法師亦余類備男（男中右）語云冬十二月廿六日率多勢令乱入当神戶迫郷之向地下神人未致所及向答令退散之處於当神戶者可致一円管領之田於所々吐荒言重相詰諸方猛威之輩近日可令乱入之旨若情張行高諸道斷所行神敵無比類者也所詮釋令現行者傍官弥宜成一同免向且任先例被營回伊雜宮且以諸方神人合力可被停止惣神戶押領企上者兼日致用意正員弥宜被進免之由有其聞者重不待告知不廻時刻可有免向伊雜神戶之由普可令相触詰諸方神人中文狀所宣如件以宣

應安五年正月十一日

弥宜荒木田神主判十人

右に依つて北朝の應安五年（一三七二）に神宮領が楠男とあるから南朝方に押領されんとする脅威があり、これを防禦する爲に地下神人へ民向の神宮信仰の台頭と共に興った御師をも動員した様である。兼日（兼日）かねてと讀む此の氏経卿引付には當時神に奉仕すべき弥宜を支配する宮司取をめぐって幾度かみにくい争いが生じているが左はその一例である。

皇太神宮神主

注進早任御教書并祭主下知旨弥宜等宮上長盛忠満相論大宮司職手

右両方許陳之旨神宮被尋下之處謹弥宜等言上者  
一神宮御修理器用之事前司忠清任中之向別而不致其禱急者又  
当司長盛道比当任者是未及御修理等無沙汰有無端迫御門表露

事近日可遂行之由今日自当司方神宮被告知畢

一 上杯參宮之御時以司代御共仕事其先例更彌宜等不致存知者也  
次宮司職一任秩滿六ヶ年之事先例也

一 前司忠清司代之仁於法衆告證犯之爭当司長監方爲反証被盜賊本人<sup>4</sup>取書狀於正文吾備上嶋之由<sup>5</sup>于神宮令告知同彼案文一通書渡畢此條文反証勿論歟之處又件<sup>6</sup>法衆舍住僧慶佑房益人不存知之由<sup>7</sup>于神宮出書狀之同又子兩杯之事諸令相直者也然同共以令注進處也次当司長監舍弟長資強過之爭朝熊獻尋之處不存知之由返狀如此則擇彼狀者也……

永享五年五月十日

鎌倉期から室町期にかけて神宮の民間信仰が盛んとなり、この結果は飛神明思想まで室町期にあらわれた。二の杯な風潮の中に伊勢神宮を京都辺その他で勧請するものがあらわれた。その爲神宮側ではそれを放置しておく事は神宮の權威を害するものとしてその衆却を幕府や朝廷に頼出ているのである。その場合、高宮寮頭藤原相通が平安時代長元四年に神宮勧請をなし處罰された例をあけていうのは面白い。この事件は可成重大なもので藤原実資の小石記や源経頼の左経記等に誤記してあるから京都に於いても重大な問題となったと思う。引付には内宮外宮共に注進しているが、外宮の方が詳細なのでそれを掲げてみよう。

#### 豐受太神宮神主

注進被早被経殿密御沙汰蒙御成敗被停止於沼中沼外号今神  
明致 大神宮御殿造立子細事

右謹換旧典泰二所 太神宮者異于天下之諸社也謂御鎮座之任

所者往昔御降臨以前先自天上<sup>8</sup>被降給布五十鈴御寶并曰之小言  
図形文形等然後尋自高天原所下之驗物可有御鎮座之由神宮之同  
有美宮處<sup>9</sup>見定給布在所今之宮地是也因茲興王神<sup>10</sup>即以地轉  
之精金奉敷下津盤根本宮柱太敷立御鎮座以來經以他所御移事更  
無之而於任々所々忍奉勸請尊神之條神慮之恐不少自然其在所爲  
神領之時爲其符以未社奉祝告古今雖在之於近年所々忍莊嚴於正  
殿徹整千本輕木御飭之金物等造進大床御階三條格式違犯者也  
是全非敬神之儀併神慮違背之族也此等之趣而宮大小同官一同難  
存<sup>11</sup>今不申可申送年月之處近日友佐過法之同令注進言上價校光  
列長<sup>12</sup>元年中齊宮寮頭相通<sup>13</sup>（資通）等二所太神宮託宣之由申之寮  
中建立社體致忤言爭有之荒衆神託齋内親王以相通之族可慮重科  
之旨御託宣之同即經 奏聞燒弃社體被流刑相通望於齋宮院内寮  
頭之所行猶以神不享非例況於他所乎自由勸請之儀甚以不可然者  
吹稻又号濁立於神前沙汰之爭神宮曾無其法如此之條々不忍上聞  
不憚神鑒爲神爲君不忍也不信也不可不被停止然早被経殿密御沙  
汰蒙御成敗亦爲專御祈禱謹注進言上如件以解

永享十年十一月 日

#### 十人署

第二卷には御厨に關する文書が沢山あり、それは神宮経済の  
後退等を知る上には貴重なものである。今その一例を示してみ  
よう。此の文書には己に室町期に経済的な実力を掌握し、山田  
自治体の中心勢力をなした土倉たる榎木蔵、久保倉、南倉、中  
倉の四倉の一つ榎木蔵の経済が神家を圧迫したことがみえてい  
る。

#### 一斤宣

司早任先例依理還爲勝致惟清沙汰伊勢国慶会部

手庭事

右件御尉吾季滿神主代々相伝無相違在所也然依有子細 皇太  
神宮弥宜氏經神主に年貢參分一并代官私事永代還渡畢仍去嘉  
吉三年十一月三日季滿神主乃還伏明鏡也然自代經神王方依令  
買得款一圓<sup>(の)</sup>仁令押領之条太以無謂於代官職并參分一年貢吾恒  
年爲勝令知行於相茂年貢吾榎木蔵エ取渡相牙可再神役勤君也  
仍所宣如件以宣

享徳元年八月三日

弥宜荒木田神主判八人渡加判十林神主差合

右の文書中去伏<sup>(還伏)</sup>に去文という言葉があるが、これは  
土地その他財産に対する権利を他人に引渡し、自己の権利を放  
棄した事を記し、後日の証拠とする爲渡す証書で形式は普通去  
渡<sup>(還渡)</sup>奉還渡の文書があり、最後の書留にも去伏等の文書  
がある。(牙に封じたがいにとよむ)

以上は、引付の中から僅かに五例を選んだにすぎないが、引  
付の中には室町末期の歴史を明らかにするのに重要なものを数  
多く持っている。地方にあつて教育の實際に従事していかなら  
ない我々は文書のみでなく考古学の土器の識別も、芸術品  
の弁別も、ひいては全教科の知識を備えておらねばならない。  
これを感じる我々はそういう方面に対する無関心と知識の無さ  
を痛感せずにはいられない。

この意味からも、面白い仕事であるが写真にして我々に読  
ませて下さった中田先生に対して心から感謝するものである。

その外我々は近世史学会の有志の君で中田先生を中心にして

近世史料を写真で講読し、他方では宮川滿氏君大岡検他論の講  
読もなして向題桌を討論し合っている。我々は先輩諸兄姉の足  
跡をばづかしめぬ微力を尽している。近  
近況を報告して諸兄姉の御活躍を祈念するものである。